

昭和の松下村塾 ―高師附属中学の発足―

本校の前身、金沢高等師範学校附属中学は、昭和二十二年（一九四七）四月発足し五月二十四日付けの官報で正式にその創設が公示された。発足当時の生徒は、六・三制の実施により新たに募集した新制中学一年生八十名（男女共学クラス一学級、男子クラス一学級）、特別科学学級から転入した二年生から四年生まで各一学級、合計しても百三十七名であった。入学式当日に着任していた教官は、小池善雄主事のほか水上勇太郎、佐々木宜男、土井盛夫、伊藤幸重郎、沓木（久野）和雄、酒井馨のわずか七名であった。校舎も現在自衛隊駐屯地となっている旧山砲隊兵舎の一部で、実際に使用できたのは一棟のみ、その他は小使室・倉庫・便所だけであった。入学試験の時はまだ兵舎の名残が歴然としており、あちこちに兵器・皮革の残骸が転がっているという始末、新しいものといえば、机と黒板ぐらいであった。

初代主事（現在の校長にあたる）小池善雄は入学式の翌日、校舎の裏庭の若草萌える広場で、かつて吉田松陰が「松下陋村といへども誓って神国の幹となれ」と塾生を激励した例にならって「我らの附属も小粒ではあるが、新国“即ち新日本の幹たるの意気をもつて進もうではないか”と大いに抱負を披瀝し、士気を鼓舞した。小池は、文字どおり「無から有を生み出す」思いで、理想に燃えて学校づくりに臨んだのである。

いよいよ授業が始まった。ところが文部省から与えられた初年度の経費では、兵舎の倉庫を教室らしきものに改造し、必要な机と椅子を揃えるだけで精一杯であった。理科の実験に使うピーカーも試験管もろくにないという状況だった。生徒たちはまず空瓶や空缶を集めて廃物利用にとりかかった。砲兵が厩で使っていた飼葉桶は水槽や飼育箱に早変わりした。化学担当の酒井の備品棚には屑鉄、鉄板、ねじ釘、板切れ、ベークライトの破片が

昭和22年度

4	4	5	5	5	5	5	5	6	7	10	10	11	1	2	2	2	2	3
15	30	2	5	8	24	28	29	13	14	2	17	8	13	6	19	21	23	23
旧山砲隊を校舎として第一回入学式、転入学式挙行	帽章、襟章できる	新憲法記念講話（粟津教授）	三小牛山で自治会発会式	高師開校記念日（挙式）	官報に金沢高等師範学校に附属中学校（旧制）が付設されたことが告示、小池善雄、主事就任	校内運動会	一年生測候所見学	二年生那谷寺方面旅行	栗崎海岸水泳練習	校内運動会	開校記念祭・運動会・展覧会	開校記念式 10 音楽会 11 演劇	2. 28 教育実習（高師理科各部）	生徒研究発表会	父兄会	特別科学教育研究会	三年生新制中学卒業式	

並べられた。インク瓶でアルコールランプを作り、空瓶の輪切りでピーカー、ロートを作
 った。生物担当の久野が蛙を教材に扱ったときのことである。授業から数日後、薄暗い倉
 庫の片隅にチョークで書いた板切れが立てられていた。生徒の文字で「二年生実験室、無
 断での出入りを禁ず」。中に入ると戸板の上にいるいろいろな瓶や缶が並べられ、その中に蛙
 の卵やおたまじゃくしが入っている。チョークで尾の再生実験、植物性餌と動物性餌の成
 長に及ぼす影響、薬品に対する抵抗性、色素の変化が記入されている。いつのまにか倉庫
 は、生徒自身の実験室と化していたのである。

食料不足の中で勤労デーと銘打って学校農園も実施した。それぞれ家から鋤を持参して
 防空壕を埋めたり、空き地を利用してサツマイモ、タマネギを作った。生徒よりも教官の
 方が畑仕事が苦手で、表面だけを鋤で掻き回しこやしも入れず後は自然任せ、収穫した小
 粒のイモを見つめて「苗に使った種イモの方が多かった」と嘆いたという逸話も残ってい
 る。なお、運動場はこの年金沢で開催された第二回国体の会場となり、大幅に改修された。
 草創期の附属は、生徒と教官が一体となって学校づくりをしていった。まさしく「昭和
 の松下村塾」であった。



手取川遠足 1948年9月 下吉野谷駅で
 草鹿鈴江氏(2回生)所蔵

代議員会議長	副会長	会長
塩野 宏	田中 洋彦	水谷 靖邦

合計	中4年	中3年	中2年	中1年		学級		昭和22年度 4回↓1回
				2	1	男	女	
115	19	21	15	40	20	20	計	
20	19	21	15	40	40	合計		
135	19	21	15	80		正	主	
	藤田	土井	久野	佐々木	水上		任	
	伊藤	出石	高瀬	酒井	広川	副		